

2003年度
TDAテキスタイルスクールの成果と今後の課題

TDA理事長 わたなべひろこ

新しい時代に対応するテキスタイルクリエイターの資質向上、プロフェッショナルな人材育成を目的としたTDAテキスタイルスクールが、東京と大阪同時に開校したのは、2003年5月であった。スクール大阪は、大阪化学繊維会館を、スクール東京は日本教育会館を会場とし、それぞれ独自のカリキュラムながら同じ目的で運営し、3月13日の講座をもって2003年度の全部の講座が修了した。参加人数は、毎回運営に携わった会員も含めると延べ900人余になるのではないかと思う。この1年を振り返っていろいろの想いにかられている。

講座のあり方とともに、産地見学会や、工場での実習の経験、求められるクリエイターとは、どのような資質と技能を持たねばならぬのか、何を学び、どう行動すべきなのか、若い次世代の人達に何を伝えねばならぬのか、国際化の中で日本のクリエイションは如何にあるべきなのか…等々。時代の動きの中で、クリエイター自身の自覚と意志で発足したスクールであったが、そのメッセージが伝えたい人達に、本当に伝えられたのであろうか、効果が得られたのであろうか、反省している。

日本の繊維産業が低迷する中で、生産地はどんどん国外に流出し、日本の将来はこのままで良いのかと真剣に思う。経済産業省から繊維ビジョンが発表され、産地中小企業の自立や輸出振興が国家支援政策として打ち出され、5年計画の内容があちこちで発表されると、業界は活気づいた感がある。これらの大いなるカンフル注射によって、加速度をつけ、業界が浮上して行くことを大いに期待しているが、この政策も、過去の即効的な効果同様、また、次の息切れが来るのではないだろうか、これで本当に日本国内の空洞化が防止できるのだろうか、と一抹の不安を感じている。人材育成についても、何か根本的な対処が見落とされ、本当に重要な部分が抜けているのではないかと思う。このプロジェクトを立ち上げた経済産業省の担当課長ですら、4年後の成果を見るまでもなくポジションを異動されてしまうことは確実であろう。この10年間に何人の担当課長が異動していったことであろうか。

不況の中で、“日本の商品に付加価値を付けよ”“ジャパン オリジナリティをつくれ”“デザイナーは売れるものをつくれぬのか”“新しい時代に対応する能力のあるクリエイターはいないのか”等と叱咤されているが、欧米のトレンドを追いかけるのを良しとし、産地を下請化し、自立を萎えさせ、クリエイションのソフト面を粗末に軽んじ、不況になれば真っ先にデザイン部門を切り捨てて来た企業や人達が、俄にジャパン オリジナリティを唱えても、不信や反撥を感じるのは、私だけではないだろう。

今こそ、クリエイター達は大いに怒らなければならない。立ち上がって、自らの志を示さねばならない。自らを鍛えて、その力を示さなければならない。これからの仕事にスポットを当てさせ、社会にメッセージを発信しなければならないと思う。

講座の中で一番心に残ったのは、2月14日東京で開催されたTDAのメンバーによる〈テキスタイルの未来と国際化への対応〉というテーマで語られた、それぞれの熱い思いであった。

“繊維素材ほど人間の生活に密着した素材は無い”その豊かさ、面白さ、そのものづくりの可能性への意欲や、夢を語る言葉に感動すら覚えた。

或るファッション系の専門学校の理事長が、あるところで、「テキスタイルデザインは大切だと思うが、一般に学生達は、テキスタイルについて勉強するのを嫌がります。」と語ったことがあった。ファッションデザイナーは華やかだが、テキスタイルデザイナーは、学ぶことが地味で、しかも多い、その割に社会で評価されないのである。しかし、日本の繊維産業を本当に支え、世界に進出できる基盤は、テキスタイルのものづくりにあるのである。

2004年度も、TDAスクールは日本テキスタイルデザイン協会の責務のひとつとして、更に深く掘り下げるとともに、広い視野と展望をもって独自の活動を続けてゆきたいと思っている。技能の習得やビジネス メソッドの学習は、内容も明快であり、割に短期集中型の学習も容易で、評価や成果も見えやすいが、未来を拓くリーダーとなる真のクリエイターの育成は、感性の錬磨に加え、多岐に亘る技能と経験が必要であり、長期的な理念がなければ困難である。

私は、目先のビジネスだけでなく、日本の風土を愛し、自信とアイデンティティをもたない者に、本当のジャパン オリジナルはつくれないと思う。また、日本の文化を愛し、誇りをもたない消費者の中では、本当のジャパン クオリティは育たないとも思っている。